アメリカ文学とユーモア

コンスタンス・ル
原島善

アメリカ文学とユーモア

―国民性の研究―

コンスタンス・ルーァク著
原　島　善　衛　訳

株式会社　北　星　堂　書　店

訳者略歴

大正3年東京に生れ東大文学部卒。英米文学専攻。カリフォルニア大学留学。現在学習院大学教授。日本英文学会会員。訳書チャールズ・ディケンズ「クリスマス・キャロル」，ジョージ・R・スチュアート「アメリカ文化の背景」R. W. エマソン「個人と社会」；論文「エマソンのイギリス観」その他。

昭和36年9月10日　初版発行
昭和37年10月10日　再版発行

☆アメリカ文学とユーモア☆

©

原著者　Constance Rourke
飜訳者　原島善衛（はらしま よしもり）
発行者　株式会社 北星堂書店
代表者　中土順平

発行所　株式会社 北星堂書店
東京都千代田区神田錦町3丁目12番地
電話(291)4532・9232番　振替口座 東京16024番

印刷：二美堂印刷　製本：高橋製本

定価500円

アメリカ文学とユーモア

目次

まえがき……3
第一章　ヤンキーのユーモア……5
1　ヤンキーの特徴　2　仮面の使用　3　ヤンキーとイギリス人　4　ヤンキー・ヒル　5　ジャック・ダウニング　6　ヤンキーに対する礼賛　7　奥地住民との交流
第二章　奥地アメリカ人のユーモア……37
1　西部の幻想　2「荒野の闘鶏」　3　奥地住民の生活　4　ほら話　5　クロケットとフィンク　6　雄弁術　7　自然の礼賛　8　ほら話の技法　9　スリックとパッチ
第三章　ニグロのユーモア……85
1　ニグロ芸術の起源　2　ライスとエメット　3　黒人演芸団　4　喜劇のトリオ
第四章　旅の芸人……119
1　初期の演劇　2　巡業役者　3　喜劇への転換　4　バーレスクの先覚者　5　宗教劇
第五章　喜劇詩人……155
1　アイルランド的要素　2　女性と社交喜劇　3　短篇説話　4　リンカーンのユーモア　5　新・旧の接触　6　ディレタンティズム

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六章　アメリカ文人の声……181
1　エマソンとソロー　2　ホイットマンと土着の伝統　3　ポウのユーモア　4　ホーソーンと情緒　5　『白鯨』の喜劇性　6　オウデュボンその他
第七章　カリフォルニア海岸から西方に面して……223
1　西部の征服　2　マーク・トウェインと喜劇伝説　3　アーテマス・ウォードその他　4　地方主義の喜劇的要素
第八章　アメリカ人……257
1　南北戦争の衝撃　2　ヘンリー・ジェイムズと国際場面　3　アメリカ人の肖像　4　ジェイムズの寓話性　5　ハウェルズの社会喜劇
第九章　むすび……291
1　ディキンソンの抒情詩　2　ロビンソン、リンゼイ、フロスト、サンドバーグ　3　現代小説の諸様相　4　現代のユーモア　5　現代文学と土着の伝統
研究資料について……333
訳者あとがき……345
索引……362—354

アメリカ文学とユーモア

——国民性の研究——

まえがき

一国民の全般といってよいほど広範囲にわたるユーモアを追求するとき、われわれはうっかりしていると、ある隠れた落し穴に陥ることがある。それはおそらく、古いものに対する嗜好が涌いてくるためであろう。古いユーモアの断片が発見されると、われわれは、それが朽ちた彫刻か彫像であるかのように、微細に調査しようとする。それをジャクソン大統領以前の時代に属するユーモアであるとか、初期メイン州、後期アーカンサス州のユーモア、またおそらくアメリカ的なユーモアではなくて、起源不明の、たとえばフランスふうの新しいユーモアなどと命名することができると、自慢めいた気持ちがもりあがってくるのを常とする。しかし、このように学識をてらう誘惑を感ずる一方において、それを超越する別種の興味もまた、われわれに起こるだろう。というのは、ユーモアは一国民の性格の全体を形づくり、それに風味をそえる奇想の一種類であるからだ。一個の国民に例をとれば、喜劇的感覚が一時的な興奮の状態から、国民に共通の所有物という大きな流れに移ると、その方向はふしぎなほど多方面にわかれる。アメリカ人の性格として、ユーモアと無関係な反面、また何らかの意味でユーモアの支配を受けない反面は、ほとんど無い。ユーモアは、

ただ折にふれて用いられる手法の域を脱して、全般的な類型と意図とを決定する原動力として、文学の領域に入り込んできた。それはしばしば不意打ちをくらわせる奔放な要素である。独自の迫力を持つ一方において、ユーモアの旺盛な活動力は、ユーモアを構成要素の一部として包含するあの性格の領域にまで人びとを誘って、その研究に没頭させるのだ。

最近、アメリカ的な性格は、アメリカの批評家からいちじるしく注目を浴びるようになったが、その全部が自己満足的な注目であるとはいえない。「こうして事実上、われわれが自国と争うのは、不愉快な仕事だ」と『ロデリック・ハドソン』に出る人物ロウランド・マレットは言った。この争いは、ヘンリー・ジェイムズがこの小説の背景とした時代、すなわち、南北戦争後まもなく始められたものとおもわれる。その形跡は、それ以前にさかのぼることもできよう。争いは深刻化し、ときには重苦しくもなった。それはまた、しばしば爽快な争いともなり、ときには局限されて、歓喜にあふれながら、しかも無秩序にはならなかった。全般を貫く音調はあけすけな音調であるから、われわれもあけすけな態度でこの争いに応じてよかろう。この本は、アメリカ的な性格と争う意図をもって書かれたのではない。争いをいどむとすれば、自然の風景のうちすでに固定された地形に、議論を吹きかけるような結果となる。そうかといって、この本はアメリカ的な性格を弁護するものであるともいえない。一冊の本を書くのは、感謝の気持ちをこめて負債を返還するのと似ている、と言った人がいる。この研究は、アメリカ人の気まぐれな心の動きを鑑賞することに発し、こうした心の動きは、変化に富み、微妙であり、たくましくもあり、ときに乏しくても貧しいとはいえない伝統を織りなしてきた、との信念から展開した。

第一章　ヤンキーのユーモア

1

十八世紀末葉のある真夏の夕暮近く、赤土のけわしい道を下ってキャロライナの肥沃な平地へ行くひとりの旅人がいた。彼は杖をつき、背をのばしておおまたの急ぎ足で歩き、長身の彼の影は木木の長い影を横ぎった。首を前にかがめた彼の背筋は長く、肩には重荷がかつがれていた。

旅人の姿をま近かに見ると、居酒屋でくつろいでいる男女、また農園主の門のまわりをかこむ納屋の附近にいた男女はびっくり仰天した。「あれはきっとヤンキー〔訳註・本書でこの語はニュー・イングランド地方の住民を指す。〕だ。もしちがったら、わたしは撃ち殺されてもよい」と、ひとりがさけんだ。たちまち中庭から人影は消え、ドアや窓はあわてて閉ざされた。行商人は容赦なく近づき、入口に来ると、くぐり戸のうえに荷物を置いた。家の住人たちはあらかじめドアのかんぬきをおろし、銭箱に二重の錠をかけておいたが、それはむだだった。ほとんど躊躇の色も見せず行商人がこれらの家々にはいると、銀貨は彼のポケットに流れ込んだ。荷物がとかれると、キャラコの布地、ぴかぴか光るナイフ、剃刀、鋏、時計、木錦の帽子、靴、そのほかの小間物類が祭日の市さながらの光景を呈した。明星のように光る剃刀の切れ味はすばらしく、それはアンダルシア地方のほら穴でダイアモンドの光を浴びながら製

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

造された品だった。行商人はヒコリー材の茶碗、鉢、皿を見せて、隣り村の人びとは土器が病気を伝染することを知っているので、おお急ぎで土器類をこわして道ばたに捨てた次第に言い及んだ。そして彼は疫病の話をした。結局、彼が戸別にはいりこむと、みんな何かを買った。ニグロたちは小屋から出てきてこの熱烈な狂言を見守り、彼が悠々とおおげさな身振りで語るのを傾聴していた。その晩を居酒屋に泊った行商人は、宿の主人が寝ているところを起こし、朝飯を食べているところを呼び寄せて取引をした。そして、この居留地の金の大部分を身につけて去っていった。

全部落の人びとは磁力に引きつけられるように、行商人の角ばった姿が暗褐色の影となっておもむろに谷をくだり、隣りの丘の急斜面をのぼり、やがて頂上のかなたに消えるのを見つめた。まもなくわれに帰ると、彼らはこの異様な人物について思いをめぐらせた。うわさによれば、彼は西インド諸島で真鍮のあんかを一荷売り、流行の白い紙製の帽子を一荷かついでカナダのある村に着いたが、コレラのために市場が得られないと、帽子を乳鉢でひいて丸薬にしたという。彼はいつもひとり旅をしていたし、政治についての談議は拒んだ。そして酒も飲まず、闘鶏に賭をするでもなかった。取引がすむと、彼は売り歩く品物のように鈍感な姿に戻るのだが、話す言葉にとげがあり地方色もあって、刺戟すれば辛らつな応答を誘い出したことだろう。「東部では、雌牛と小牛とキャラコの上衣が娘の嫁入りどきの財産だという話だね。で、君は東部から来たのだね」と、ひとりの南部人が行商人に言った。「そうだよ。じゃあ君は、あのじゃがいも畑に広いひびがいって、いなごも飛び越えられないようなところから来たのじゃないかい？　そこでは、あれが長男の親ゆずりの財産なんだろ」と、ヤンキーは言った。彼は話をつづけた――「わたしのおやじから聞いたのだが、

このへんの土地が荒れているのを見ながら、ある農園のそばを馬車で通ったそうだ。おやじは『この土地の持ち主はひどく貧乏しているにちがいない』と言ったものだ。すると野いちごのやぶのかげからだれやらの声がして『おまえさんが思うほどの貧乏じゃないよ。なぜなら、わたしはこの土地の三分の一しか持っていないのだからなあ。わたしのおやじは土地を三つに分けて、みんなにやってしまったのだから』と言ったのだ。」

ミシシッピー河の沿岸に次第にひろがる居留地を通り、辺境地（フロンティア）に沿うてこの足ながの魔術師は何十年となく足を引きずり、森林に深くうずもれた農園に色彩を散りばめ、耳新しく気のきいた物語で風味をそえた。彼はたえず新しい地域に入り込み、移住民の跡を追ってオレゴンへ歩み、あるいは平原を越えてカリフォルニアの金鉱へねり歩くその姿は、長年にわたって見うけられた。人目から遠ざかれば遠ざかるほど、彼はおとぎ話に出てくる茶目でやせた妖精の姿に変りはて、あるいは、人間よりも多少大きな姿ともなった。彼は神話の人物であり、一種のまぼろしでもあった。南部・西部はいうまでもなく、ニュー・イングランドの人びとまで協力して、この姿を具体化しようとした。ヤンキー行商人の生活と事実とは、推察にまかせるよりほかはない。ブロンソン・オルコット(Bronson Alcott) もかつては行商人であった。彼らは全身に形而上学をたたえており、その秘密の扉はまだ開かれていない。十八世紀の末までに、このすばしこいまぼろしは確固たる地位を占めるようになった。

しかし、行商人はヤンキー神話の一面にすぎなかった。独立革命の期間に、多芸なヤンキーが『ヤンキー・ドゥードル』("Yankee Doodle") の歌の調べに合わせて悠々と現われ、やがてこの種

の人びとが数多く地球上に散らばった。シナかチベットか、あるいは北アフリカの土地をひとかきすれば、たちまちヤンキーが出現して機知をもてあそんだであろう。一八〇〇年以前のことであるが、パサマクォディ〔訳註・Passamaquoddy メイン州とカナダとの境にある港市。〕から来て、数人の詐欺師にだまされてある下等な居酒屋に誘われた船長の物語がロンドンに流布した。詐欺師は彼にカルタの賭けをさせることができないので、ぶどう酒を三本平げて立ち去った。居酒屋の主人は同情の体を装い、頭を振りながら言った「ところで、君はわがロンドンの刄物の切れ味を御存知ないんだろうね。君が勘定を払わねばならないのだよ。」アメリカ人船長はちょっと狼敗の体だったが、ゆっくりと銀貨をひとにぎりとり出して、それを見つめながらあとひとびん註文した。主人がぶどう酒をとりに去ると、お人好しのアメリカ人は急いで炉台のそばに歩みより、白墨で勘定の総計をしるし、さらに「君のロンドンの刄物につけるヤンキーの柄を残していく」と走り書きして、店から姿を消した。

ヤンキーはしばしば実際的であるといわれた。しかし、彼の周囲に集積したうわさと思い出の断片から推察すれば、彼の有名な工夫の才能は、実用的な天分というよりも、むしろ変化を生み出す「こつ」であるようにおもわれる。彼らのうちには変化を与える刺戟を商売から学んだ者もいた。あるヤンキーははるばる西部の政府保有地まで商売に出かけ、そこで土地の所有権を確保するとその地域で商売した。売る物が尽きると、この権利まで売り払い、未開地をつぎつぎに移動して、最後に砂っぽい丘にたどり着いたときには、身にまとう着物だけになっていた。ヤンキーはよくナイフで細工をしながら時間を過ごした。すると彼の手のなかには、白いヒコリーの木片から思いがけない気まぐれな形のものが浮び出てくるのだった。それは実際生活には何のたしにもならなかった。

また彼が好んで用いたユーモアの形式は実際的であるといわれたが、じつはそうではなかった。入念に準備して冗談をとばしたのでは時間がかかり、そうすれば敵ができたり、手足や生命を危険にさらす結果となった。が、ヤンキーは、メインからジョージアにかけて伝説としてひろまった冗談の血筋を進化させたのである。

石の多い牧場に雑草がつきものであるように、変装はヤンキーの常套手段だった。彼は十通りの変装をして現われた。やせた背筋は長く、「落葉したにれの木のようにひょろ高い」ニュー・イングランドの馭者は、強い風が吹けば吹きとばされそうにみえたであろう。が、彼は冬でもよく南京もめんのズボンと低い靴をはいて、もろいどころか頑丈であった。古びた釣鐘型の白帽子をかぶり、膝までしかない屑麻織りのズボンをはいた背高の若者が、しばしば居酒屋に現われた。活気にとぼしい素朴なこの若者は、初対面の人との会話にも容易に誘われた。そして主旨はわかっていそうもないが、滑稽な話をはじめた。声の調子は変らずに、奇妙な比喩がとび出るのだった――「彼は蛇が黒い皮から抜け出すように、なめらかに歩み去った」とか「そこでわれわれは人間の大海原の真中にいて、猫の背のように高く足をあげて踊りまくった」というように。公平な事実とそれを彼が切りつめて改変したものとのあいだには、しばしば間隙があいていた。話の登場人物を配列するとき、彼は役者のひとりであると同時に、劇団の全員の代表者でもあった。

彼は用心ぶかく、孤独であった。質問をされると、おそらく彼はべつの質問で反撃したであろう。独立革命後まもなくロンドンに行った初期ニュー・イングランド生まれのある旅人が、最初に会うヤンキーは質問に対して質問で答えるかどうか、友人と賭けをした。彼らは時刻を尋ねること

を打ち合わせておいて、セイレムから来た男を呼びとめた。この男は時計をとり出して、それを見つめながら言った――「あなたの時計では何時ですか？」時刻をいうと、その返事として彼は「あなたの時計はおくれてはいませんか？」と言った。この抵抗もまた変装の一種類であるにすぎない。このように間接的な表現は、社交上の意義をもつ。直接的な返事をすれば、たいがいの場合、会話はそれで終ったのであろう。いいかえれば、質問や逃げ口上で応答すれば、話は長びいてべつの話の糸口を開く結果にもなったであろう。深い根をもつこの習慣は、多くの形式をとって姿を現わした。イギリスに渡ったヤンキーで、このような会話の型を守る人びとについては、長年にわたっていろいろとうわさされた。

たしかにヤンキーのうちには、率直で実際的で陰気な哀愁をおびた特質が存在した。しかしその背後には、驚くべきほど急速なリズムが流れていた。『ヤンキー・ドゥードル』はジグ〔訳註・テンポの速い一種の舞踏曲。〕の一種であり、それの無数の改変曲は、いろいろのものを物語っていた。その一曲は遠く古代北欧人の韻文にさかのぼる――

とうもろこしの穂軸はあなたの髪にからみ、手押車の輪はあなたのまわりを走る。
真赤に燃える竜はあなたをさらって、命とりのすりこぎがあなたをすりつぶす。

胴長で機敏なヤンキーは、故郷の灰色がかった岩からとつぜん生まれ出た、原始的な性格であるようにおもわれる。たしかに彼は、巡礼の始祖の単なる子孫ではなかったのだ。

2

アメリカ人は一国民として、幼年期をもたなかったといわれる。この環境は、損失と同時に哀愁をたたえるものとして引き合いに出されている。しかし、ヤンキーはノアの洪水以前の暗黒の世界から歩み出たのだ。その起源について熱心な研究が捧げられ、ヤンキーの性格に個人的な概念を付随させようとして、無数の理論が形成されたにもかかわらず、ヤンキーという名称でさえ昔ながらの深い暗闇にとざされている。『ヤンキー・ドゥードル』の旋律はゴールウェイ、ドイツ、スペイン、ハンガリー、ペルシャに起源すると考えられている。それはあるいは、十二世紀の教会で歌われた聖歌であるかもしれない。ある段階においては、おそらく子守唄であっただろう。その初期の歌詞の系図を知る人はひとりもいないのだ。人種的起源の問題においてもまた、安定した結論には達していない。イギリスでは長年にわたって、ヤンキーはヨークシェアの小地主に比較され、彼らもまた行商を職とする放浪者であった。北部サクソン人に伝わるこの根づよい習慣は、侵入者の集団をその地方から追い払うといわれた。もともと巡礼の始祖たちの多くは、ヨークシェア出身者であった。しかし、この血統はヤンキーの性格を決定する証拠とはなりえない。なぜならば、始祖たちはイングランドの南部からも多数来ており、アルスター、スコットランド、ウェールズなどの出身者がその構成要素として加わった。ヤンキーの人種的特質は、かなり混合していたのである。

初期清教徒の生活の構成が検討されるにつれて、ヤンキー勢力の源があかるみに出された。が、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com